

日本人の



京都、こころここに

れもの

vol.46

持続の力

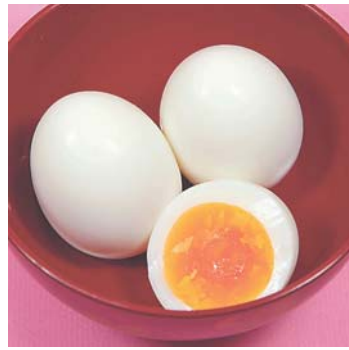
中国文学者

井波 律子さん



いなみ・りつこ 富山県生まれ。8歳から京都で育つ。京都大大学院修了。専門は中国文学。国際日本文化研究センター教授をへて、2009年より同名誉教授。著書に「中国名言集」「中国名詩集」「論語入門」など。

近頃、短期間に成果をあげることが求められるためか、世のなか全体が焦って前のめりになり、浮き足たっているような感がある。



頭に血が上り焦りに焦っても、ろくなことはない。こうした風潮を目の当たりにするとき、いつも思うかべるエピソードがある。今を去ること千数百年、魏晉の著名人の逸話集『世説新語』に見える王述という人物の話である。王述は政治手腕のある有能な人物だが、極端なせっかちであつた。ある時、ゆで卵を食べようとして箸で突き刺したが、うまくゆかず、激怒して卵を床に放り投げた。すると卵は床をコロコロ転がって止まらない。ますます腹を立てて下駄で踏んつけようとしたが、またうまくゆかない。そこで床から拾い上げ口に入れて噛み砕くと、腹立

ちまきれにすぐ吐きたし、せつかくのゆで卵を無駄にしてしまったというものだ。まったく頭に血が上り、焦りに焦つてもろくなことはない。

エネルギー蓄え2年かかってみごとに開花

それはさておき、先月末、わが家では三鉢の牡丹が絢爛と花開いた。このうちピンクの牡丹は購入した一昨年春には、大輪の花をたくさん咲かせたが、花が終るとすっかり衰えた。徐々に勢いを回復し、昨年春には九十五歳で

おりにつけ数珠ずつ編んだストール

までなら、母の持続力の結晶ともいうべきこのストールにすっぽりくるまで出かけることが多いのだが、実に暖かく快適である。「愚公、山を移す」「列子、湯問篇」という成句がある。北山愚公なる老翁が息子や孫とともに、家の前に立ちほだかる二つの高山を切り崩そうと、倦まずたゆまず作業しつづけたという話にもつくものだ。私自身はといえば、昔は何でも早く完成させたいと、やっきになりがちだった。しかし、大作の翻訳などはどんなに焦つても一朝一夕に仕上げることができず、最近母の編み物がその典型であるように、「愚公、山を移す」の積み重ねしかないと思ひ、持続を旨とするようになった。そんなこともあって、めまぐるしい時の変化に左右されず、昔ながらの地に足のついた持続力を保ちたいと思つことしきりである。

めまぐるしい時の変化に左右されず昔ながらに地に足をつけて力蓄え



咲き誇る牡丹。時間をかけて開花のエネルギーを蓄える(長岡京市・乙訓寺)



戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

日本の暦

三船祭

平安貴族を代表する教養人、藤原公任のエピソードに「三船の才」があります。藤原道長が嵐山の大堰川で船遊びを行った折のこと。漢詩、和歌、管弦と三種ある船の「どれに乗るか」と問われ、公任は和歌の船を選び、一首を詠みれば、「小倉山、嵐の風の寒ければ、もみぢの錦着ぬ人をなき」見事な歌を称賛する人々に、公任は「漢詩の船にすればよかった。名声はもつと上がったろうに」と漏らしたといひます(大鏡)。



西村 明美さん

和の美意識

情報が簡単に手に入り私たちの生活や環境がどんどんと変わりゆく中、海外から来られた人々の言葉に、忘れかけていた日本の美に立ち返らせられます。ある建築家は築しつづける「日本建築は細部まで行き届き心かよわせ合う温かみがあり、自然に気持ちがかみ合っていく」と。ある青年は「アメリカのビル群の中で出合った日本庭園は僕に微笑みかけてくれ、優しく安らぐ気持ちになった。この体験が僕に京都への思いを募らせた」と。また日本の物作りを高く評価された経済学者は「一方的に他を圧倒するのではなく、心地よさが層を成し現れ、奥へ奥へと誘われた滞在時間は他の国では出来ない経験」と、印象深く語られました。

姿かたちの違つてもを絶妙なバランスで取り合わせて空間を作り出す日本人の美意識は、自然を愛しみ相手を活かす心で長い時間をかけ育まれて来たものです。短い時間で多量な物が手に入る昨今、世界の人々を惹き付ける和みの空間は少しづつ姿を消し、京都の町は不協和音を奏でつつあります。「京都の人々の、人となりが美しかった」と言われた言葉が、私だけではなく京都に住む人皆の心に届きますように。 (次回5月27日のリレーメッセージは、日本舞踊家の西川充さんです) (日本人の忘れものは、京都新聞ホームページ http://kyonon.jp/kp/kyo-np/info/nwc/1/でご覧いただけます)

人間をみつめる。京都で100年。

私たちは開学以来変わることなく仏教精神に根ざした人間教育に力を注いできました。「人は人に対して何が出来るのか」を根源的な問いかけとし、社会の多様な分野で人々に寄り添いながら活躍できる、素晴らしき「佛教大学人」を輩出していくこと。それが、今までも、これからも、本学の使命です。本学を支えてくださった地域の方々、学生のみなさん、大学に携わってきた先人の惜しみない努力に、深い感謝の思いを持つと同時に、「縁」の大切さをあらためて感じています。

感謝 ありがとうございます 学長 山極伸之

佛教大学は、2012年10月 開学100周年を迎えます。

ALL 佛大 ぶったんパレード

佛教大学100周年カウントダウン 2012.10.23

5/20 SUN. 13:00~15:00



平成24年10月23日に開学100周年を迎える佛教大学が、京都と共に生き、育てられてきた「感謝〜ありがとう〜」の気持ちを込めて、大学のキャラクターである、ぶったんと共に京都のまちをパレードします。佛教大学吹奏楽部、チアリーダー部はじめ元気いっぱい学生、OBOG、教職員による行進、そして河原町三条、河原町四條、川端四條、東大路四條、知恩院三門前広場では、「東日本大震災救済金募金活動」を行います。



佛教大学

www.bukkyo-u.ac.jp/ 仏教学部/文学部/歴史学部/教育学部/社会学部/社会福祉学部/保健医療技術学部